汴路鐵道の經營

頗る要衝に當る。史上其の名の高き宜ならずとせず。然れども殘牆遺壁の間、穴居の民多く、桑田碧海の變、今は兵を用ゆべくも非ざるなり。

虎牢城より山寨を經、南進二里餘、其の北側に、一條の鐵路を經營するもの、即ち汴路鐵道にして、汜水以東は、久しからざる內に、工事竣功すべき狀況に在り。

虎牢關を出でゝ、西南方に進むや、騾馬絡繹として黑囊を負ふに遇ふ。就て之を訊すに鐵道敷設用の砂礫を遠く山中より運搬するもの、其の一囊費一百文と。一省全部殆んど黃土を以て掩へる河南に在りては、左もあるべきことならん乎。道路は緩縵なる上坡を成し、依然兩側斷崖之を攀登せんと欲するも坂路なし爲めに路外一步の地を見る能はず。所謂馬車馬的に前進しつゝ、馬口に達せば、道路は此に南北兩頭に岐る、北路は黃河の沿岸に通じて較々近きも、車輛は勿論、騎行も間々下馬を要すると。因て予は南路の大道を取り午後五時十五分坡上に達す。蓋し坡上は汜水より高き約二百五十米突餘。

上坡は傾斜甚た急、約六十の角度を示せり。南側に紫岩を產す、一塊凡四十文に價すと云ふ。且つ其の南北兩側面の峪間には、彼の階段を設けて、階上穴棲の者多